



日吉開窯九〇周年記念誌



一 挨拶

京都日吉製陶協同組合

理事長 高島 昭雄

大正二年（一九一三年）に日吉地区（通称蛇ヶ谷）に故西仁太松氏により、登窯が築窯され陶業地としての産声をあげてより、本年で九〇年目と相成ります。雑木林を拓き山田を敷地にし、ここを陶業地とされるについては、我々の想像を超えたご苦労があった事と存じます。

西仁太松氏を先頭に、初代福田松斎、若林与三松、平野善四郎、吉川作松の四氏が力を合わせて陶業地としての基礎を固められたと聞いております。その後最盛期には登窯一五基が稼動し、特に磁器物については、京都最大の産地として京焼陶業界を牽引し、その発展に尽くしてきたと言っても過言ではありません。

五年前よりは、毎年春に日吉窯元まつりを開催し、私達作り手と地域の皆様はじめ、多くの方々と触れ合う機会を持てるようになり、ややもすれば敷居が高く、閉鎖的な雰囲気が残っていた当地に風を起し、より明るく、親しみやすい工房集団としての産地を目指しております。

また窯元まつりを機に、これまでの歴史の中、ここ蛇ヶ谷で額に汗し、炎と語り、焼き物づくりに夢をかけた多くの陶工達に思いをはせ、毎年故人を偲ぶ法要を行い、先人のご苦労や偉業に感謝しております。

現在、経済的には非常に難しい時期にさしかかっておりますが、当地区の若手を中心に九〇周年記念事業として様々な催事を開催し、前向きに、更なる高みを目指して一步一步進んで参りたいと思っております。また後継者育成についても十分意を尽くし、日吉地区の技術水準の維持向上を図り、ひいては京焼・清水焼の、我が国陶業界の中における地位の確立に結び付けたいと考えております。

和が日吉陶業界の更なる発展を祈りつつ、来たるべき百周年に向かっての歩みを確実にする為、全員の御協力を念願しつつ、ご挨拶と致します。



祝 辞

京都府知事 山田 啓二

日吉地区の皆様が、開窯九〇周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

思えば、日吉地区の皆様は、大正二年、当時雑木林であった日吉地区を切り拓き、窯を築かれた西仁太松氏をはじめとする諸先輩方の開拓精神を引き継がれ、歴史と伝統を大切にしながらも常に新しい京焼・清水焼の制作に取り組んでこられました。幾多の困難を克服してこられた皆様方の長年にわたる御熱意とご努力に、改めて敬意を表する次第であります。

我が国の経済情勢には依然として厳しいものがありますが、このような時代にこそ、人々の心には「ゆとり」と「こうるおい」をもたらす京焼・清水焼の果たす役割はますます重要になるものと確信しております。

また今回、開窯九〇周年の記念事業のひとつとして「お膳の中の京都」と題し、実際に京の産品を京焼・清水焼を使って味わって頂く催しを開催されましたが、日常生活における京焼・清水焼の魅力を積極的に提案される事業として、大変時宜に適したものと存じております。今後とも、京焼・清水焼の奥深い魅力を一般の方々に広くご理解頂くために、着実な事業の展開を期待しております。

京都府といたしましても、職人さんの仕事づくりや、教育の場での伝統工芸品の活用、若手職人の海外出展への支援、観光と連携した伝統工芸の体験工房ネットワークづくりなど、積極的な施策の推進に努めているところでありますが、引き続き、皆様方のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

結びにあたり、この開窯九〇周年を契機に、先人の偉業を胸に、日吉地区の皆様が更に結束を強められ、一層発展されますことを祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。



日吉地区開窯九〇周年を祝して

京都市長

柿本頼業

この度、日吉地区が、記念すべき開窯九〇周年を迎えられますことを心からお慶び申し上げます。

また、平素は、京都市政の各般にわたり、多大の御支援、御協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、京焼・清水焼は、長い歴史に育まれた卓越した伝統的技術・技法と洗練された意匠による完成度の高い品質により、日常品としてだけでなく、日本文化を象徴する工芸品として、全国においても確固たる地位を築いております。

その京焼・清水焼の主要産地である日吉地区は、皆様方の父祖が既存の生産地から移り、新たな世界を求めて開拓されたことにより生まれた陶磁器のまちであります。また、現在の製陶におきましても、先人達の開拓精神と伝統を継承する精神が脈々と受け継がれており、数々の名工を生み出しております。

京都日吉製陶協同組合をはじめとする日吉地区の皆様方におかれましては、この開窯九〇周年を契機に、貴地区において築かれた先人達の、また、その手による作陶の歴史を回顧されますとともに、貴地区に対する想いと陶磁器への情熱を新たにされ、京焼・清水焼の伝統の継承と、新たな意匠の創造を目指し、益々御精進されますことを期待致しております。

京都市と致しましては、独自に制定致しました「伝統産業の日」の多彩な関連事業や「京都市伝統産業振興館（愛称：四条京町家）」を拠点とした「京ものブランド町家工房事業」などを通して、積極的に京焼・清水焼をはじめとする伝統的工芸品の振興を図っているところであり、今後とも、日吉地区の皆様方をはじめとする市民とのパートナー・シッフの下、「安らぎ」と「華やき」に満ちた光り輝く「世界の京都」に実現に全力を傾注して参りますので、皆様方の一層の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、日吉地区が、京焼・清水焼の産地として今後益々発展されますことを心からお祈り申し上げます。



祝 辞

京都陶磁器協同組合連合会

会長 森 典弘

日吉地区に初めて登り窯が築かれて、九〇年と言う節目を迎えられ、誠におめでとございます。

清水焼発祥の地 清水坂・五条地区の市街化、狹隘と言う事で、大正時代の先人達は更なる清水焼の発展を目指して「蛇ヶ谷」に目を付けて、今日で言う同業工業団地を立ち上げられた事は、大変な英断であったと思います。 翌

大正三年にはそれが泉涌寺地区にも広がり、五条地区、日吉地区、泉涌寺地区と言う三地区が形成され、今日に至っております事を考えると、その先見性にただ感服するばかりでございます。更に戦後の五〇数年を見ても、常に業界の中心として清水焼を発展させて来られた事は、業界全体の目標であり、憧れてございました。御地区には二代目、三代目と続く方が沢山いらっしゃいますが、今後とも各地区の若手がお互いに連携しながら切磋琢磨し、更なる業界の発展を希望致します。

九〇周年記念誌の発刊を祝して

(財)京都陶磁器協会

理事長 山中 鉄一



大正二年に日吉の地に最初の窯が開かれて以来、幾多の苦難と成功の歴史を越えられ、ここに九〇周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

日吉町は、明治末期の清水焼の活況の中、次第に狭隘になっていった五条地区から、当時未だ竹藪の丘陵地であった蛇ヶ谷に工場を移転する窯元によって築かれました。「京焼百年の歩み」によれば、日吉地区は、五条地区からのみならず、全国各地からの進出者を集め、「経営面、製造面とも、新鮮さと自由さが」あるのを特徴としていたということですが、今日においてもこうした気風は脈々と受け継がれていることを私どもは強く感じざるをえません。開窯後まもなく隣接する泉涌寺地区との競争を経験し、その後互いに切磋琢磨しつつ、他地区に比べ生産規模の大きい企業が多く、そのため大正、昭和の不況期には労働争議をはじめ多事多難であったことも忘れてはならない事実です。

戦後、当時磁器原料を一手に供給していた私どもの日本陶料のみに頼ってはいけません。窯元・卸問屋を中心として商工組合を結成され、窯元の手にあった原料の供給体制を整えられたところなども、やはり進取の気風に富んだ日吉地区ならではの着眼点でした。昭和の後期になりますと他産地の量産化の勢いに押され、バブル経済の一時の盛り上がりはありましたが、平成になり、工芸品的な色彩の濃い京焼・清水焼は次第に沈滞しつつあります。こうした時期に臨んで私どもが、日吉地区の皆さんに期待していることは「温故知新」の精神です。創業当初の因習にこだわらない自由で新鮮な精神をこうした時に発揮して頂いて、清水焼全体の復興の口火を切って頂けるのではないかと考えております。昨今は窯元といいいても、陶磁器のみにこだわらず幅広く他の工芸品を取り入れるところも出てきております。こうした日吉地区の新しい試みが大きな実を結ぶように、陶磁器協会としても精一杯支援し、それが世界的な観光都市であり文化都市でもある京都の観光と文化に寄与できるようにと心より祈念いたします。



日吉開窯九〇周年に寄せて

京都陶磁器卸協同組合

理事長 前川 清幸

開窯九〇周年おめでとございます。先人のご苦労、ご努力と、今を継がれる皆様のご研鑽の賜物であります。

私事で恐縮ですが、今を遡ること四〇年ほど前、まだ小学生の頃、父に連れられ、日吉地域を歩いたことがあります。その頃は、私は商売のこととはもちろん関係なく、登り窯（今のどこかは定かではありませんが）が珍しくて、歩き回らせて頂きました。焼き物の町の独特の風土を肌で感じました。幾星霜時は移り、町の様子も窯の形態も変化して参りましたが、脈々と京焼・清水焼の技術と感性の向上に努力される皆様に対して、我々流通に携わる者として、感謝の念で一杯です。

さて、現在の景況は非常に厳しいものがあります。消費者の方により近い場所にいる我々としては、常にフィードバックするためにも、つくり手の皆様とより一層の緊密化を図り、忌憚のない意見交換を心掛けねばならないと思います。

本来であれば、「貴組合の益々の…」と結びどころではありますが、百周年に向かっては、非常に厳しい一〇年であります。部外者の申すことではありませんが、発展的改組も含めて検討されることもひとつであると愚考致します。

窯元の皆様のご隆盛を、心よりお祈り申し上げます。

特集 日吉陶業 九〇年の歩み

大正二年、西仁太松が蛇ヶ谷に築窯した。これが、日吉地区の陶業のはじめである。五条地区からの転進であった。そして、その当時に主として焼造されたのは、「粟田焼」陶器であった。

西仁太松とともに、日吉開窯当時に日吉へ転進したのは、初代福田松斎、若林与三松らであった。

大正五、六年ごろ、第一次世界大戦によって一般経済が発展し、日吉地区の陶業も活発になった。

この頃は、半磁器が流行した頃で、日吉地区でも半磁器、磁器の製造が増え、粟田焼は減少していった。現在に至るまで、日吉では磁器がその主要な製品であることは言うまでもない。

当時の日吉地区の製陶家は、西仁太松、加藤吉郎、福田松斎、初代川瀬白鳳といった人たちであった。

大正九年五月、大不況に陥った。そのため、一六日間ロク口を止めて作業を停止したという。

大正一四年の夏、労使対立の「大争議」があった。この大争議は二〇数日間にわたったというが、どのようなものであったのか、今では想像するのみである。

この「大争議」の解決後問もなく、面白いいピソードがある。それは、加藤吉郎の工場ではじめて「電動機械ロク口」が導入されたというのだ。当時は、「電動ロク口を使うなどということは、清水焼にとつては自殺行為だ」と、非難されたそうである。

もちろん、いま、ロク口が電気で廻ることが当たり前なのは、言うまでもない。

大正末年から昭和初めは、大不況の時代であった。陶磁器の単価は低価格化が進み、作れども作れども利益はなく、深夜ま

での残業が当たり前となり、労働時間は極端に長くなった。しかしながら、売価はきわめて低く、そのため賃金は超低賃金になったと伝えられている。

このような情勢もあってか、日吉陶業人のための組合が必要となった。

昭和三年三月、梅原椋山を組合長に、「日吉製陶組合」が結成された。

ここで、日吉陶業の原風景へと話しがそれることを許されたいのだが、後年発刊された「日吉陶業誌」（昭和三八年、日吉陶業五〇周年記念事業委員会刊）に次のような文章がある。

現在、松斎窯の門前から夫婦池（めおといけ）に続くあたりの風景は、古い道の面影を今によく伝えて、往時を偲ばすに充分である。

平成の今もなお、このいわば日吉の原風景を見ることができると紹介しておきたい。それは、現在も松斎陶苑の門前あたりを、坂の下から眺めれば、往時と変わらず、左手は東山の斜面が続く、その手前には、西仁太松氏のご子孫のお宅もあるの

だ。

夫婦池は、昭和三〇年代にはザリガニ獲りに子供達の集まる場所であったけれど、残念ながら今は、埋め立てられてなくなっている。

また、昭和初期に日吉で作陶した陶芸家に目を転じれば、山田喆は、岐阜の浄土真宗の寺の出身で、なかなかの人格者であったという。

その子息、山田光は、走泥社創立の陶芸家であると同時に、日吉組合の副理事長も務めた。

小山富士夫は、先述した夫婦池のあたりに住んだという。小山は後に、陶磁史家、陶磁評論家としても業績を残した人であった。

また、富本憲吉は、松斎窯と縁があつて、松斎陶苑にはその作品が残っており、平成一五年四月に開いた日吉開窯九〇周年記念展においても、安田一平（松斎）の提供で、富本の作品を展示した。

昭和二二年には、日華事変が勃発し、統制経済の時代へと入っていく。

昭和一五年、物価統制令が公布される。そして、労働組合、製陶組合は、発展的解消の名のもとに解散させられ、日吉製陶組合も解散となった。

日吉製陶組合解散式の後、全組合員は伊勢神宮に参拝して、最後の名残を惜しんだという。

昭和一七年、完全な戦時体制下となり、一二の会社が日吉に設立された。

平安陶磁器	山岸長松
松斎製陶所	福田松平
寿製陶	若林重造
東山製陶	加藤吉郎
昭和製陶	古川増太郎
蛇ヶ谷製陶	若林政吉
日本陶磁器	浅井国造
京洛産業	川瀬英一
共立陶業	浅井豊作
三幸製陶	土谷菊次郎
第一京陶	橋本七太郎
京都製陶	大島槍一郎

であった。

昭和二〇年、大戦が終わり、戦後間もなく八基の窯が築窯された。大正年間から戦前に至るまで、日吉地区の窯は一二基でありそれが一挙に二〇基に増えたわけである。

昭和二八年は、日吉開窯四〇周年の年であった。

「四〇周年記念祭」が大々的に催された。京都日吉製陶協同組合の誕生日夜、日吉陶業興隆の時であった。

「四〇周年記念祭」執行委員は以下の人たちである。

委員長	古川増太郎
委員	福田松平、馬場信孝、松本華、高島隆司、橋本七太郎、土谷菊次郎、井上幸一、川尻七平、山崎光洋、加藤由吉

昭和三三年四月、「京都日吉製陶協同組合」が創立された。

初代理事長 高島隆司 以下

井上幸一、市川和一、馬場信孝、加藤由吉、川尻七平、高島敏秋、武内四郎、高野綱一、土谷稔、倉元庄三郎、山崎忠作、山田英一、山田光、福田松平、深田渉、他

五三名による一大製陶組合の誕生であった。以上、大正二年から昭和三三年までの約四五年間の日吉陶業の歩みを概観した。

前述の通り、この年に、現在私たちの属している「京都日吉製陶協同組合」は五三名の組合員により創立された。九〇年のちようど後半の四五年間は「日吉組合」(以後、この略称で記述する。)の歩みと重なることとなる。

ここで、断らなければならぬ。それは、残念なことに、日吉組合は現在にいたるまで、一冊の冊子も発行しておらず、そのため、ここからの後半四五年の歩みの確かな史料がほとんどないままに、記述をしなければならぬ。

昭和三三年より現在にいたる、日吉組合四

五年間の歩みの史料がほとんどないということ、過日、三代理事長古川清氏、四代理事長土谷稔氏、現六代理事長高島昭雄と、我々当記念誌編集委員が集い、そのときの会話をもとに記述を進めることになる。

数人の記憶に頼って書くことは、疎漏もあるであろうし、また、簡略に過ぎる記述となる。その責はひとえに筆者にある。ご容赦を願いたい。

さて、昭和三三年四月に日吉組合は創立されたが、当時の日吉で陶業を営む窯元の一部がそれに参加をしたわけではなかった。三、四の有力な窯元が、意見の相違から参加をしていない。

それと関係があるかどうか、日吉組合が法務局に登録して法的に設立した日時は、実際より二年一ヶ月後の、昭和三五年五月一八日である。

おそらく、昭和三八、九年頃から、日吉で陶業を営むほとんどの窯元が日吉組合に加盟して、四〇年後の現在にいたるのであ

る。

昭和三九年当時の組合員数(窯元の数)は六〇に近かったであろう。

初代理事長は、高島隆司(平安陶苑・社長)であった。

昭和三三年から三九年までの六年間理事長を務めた高島は、昭和三八年に「日吉陶業五〇周年記念事業」を開催し、記念誌の発刊もした。日吉組合草創期のリーダーであった高島は、大変に優秀な人物であったという。しかしながら、現在はその窯は日吉には残っていない。

一代理事長は、馬場信孝(京都製陶・社長)である。

馬場は昭和三九年から五一年までの一二年間理事長を務めた。この間のことが、残念ながら資料として残っていない。

昭和三九年は、東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通した、我が国にとつてのエポック・メイキングな年である。そして、この年は、日吉陶業においても、大きな転換の年であった。

それは、この年に「登り窯」の焼成が禁じら

れたということであり、以後一〇年間ほどは、「電気窯」の時代となった。

「登り窯」の炎と煙を、筆者も六歳まで遊び場として体験したが、現在の日吉陶業の従事者で、実際に登り窯で陶磁器を焼いていた人は数人しかいない。その、今では貴重な体験談を、当組合の元理事長二人から聞けたことは、資料がない故の幸運であった。

古川、土谷両氏ともがまだ青年壮年の若き頃であったが、一ヶ月以上も作りためた品物を窯詰し火入れして、二昼夜にわたって窯について寝起きをして焼くときの満足感は「焼き屋」(窯元のことを今もこう呼称する)としての喜びであったという。「窯焚き」の良し悪しによる成功と失敗があったという。

昭和三九年からの一〇年間は、「電気窯」の時代であった。

当初はニクロム線が高温とともに切れることもよくあったが、登り窯時代の一ヶ月余りに一度の窯出し、納品が、少量で何度も窯出し出来るようになり、お金の回転がよくなったことが経営上は良かったと述懐さ

れた。

一方、電気窯の製品は、特に石もの(磁器)の冴えは悪かったともいう。

昭和四八、九年頃から、ガス窯が導入される。

ガス窯はその後現在にいたるが、炎の対流熱による焼成であって、より登り窯に近く、失敗も減り、窯を焚く回数もこなせて、便利になった。

しかしながら、それと引き換えに「焼き屋」として失ったものがありはしないか？

三代理事長は古川清(昭和製陶・社長)である。

古川は、昭和五一年から六三年までの二年間の日吉組合を率いた。

その間の組合事業として最大のものは、昭和五三年から始めた「京都日吉製陶協同組合新作見本市」であろう。

毎年三月に開催した見本市は、当時の安定した右肩がりの京都陶磁器業界の業況と良くマッチしたといえる。

筆者が記憶に鮮明なのは、昭和五七、八年頃、まだ京都パークホテルに会場を移す

前で、東山閣で開催した時、開場と同時に招待客の卸問屋の方々が各組合員の展示見本に殺到し、瞬く間に新作見本のほとんどが完売した活況のときである。

昭和六一年には、井上幸次、加藤良孝、高野史朗、古川利男ら当時の日吉の若手陶業人によって、「京都日吉製陶協同組合青年会」が結成された。

その初代会長は井上幸次であり、以後、安田一平、竹田昭義、武内真司、深田英一、倉元真佐夫、寺尾智文と続き、現在は土谷徹が八代会長を務める。

日吉組合青年会は、毎年、作陶展を開いており、近年は京都における他業種の伝統工芸青年会との共催による展示会も開催している。

後述する、平成一一年から始まり、今年が第六回となる「日吉窯元まつり」においても、日吉組合青年会の協力と行動が、大きな役割を果たしている。

四代理事長は、土谷稔(三幸製陶・社長)である。

昭和六三年から、平成四年までの四年間を務めた。

土谷は、当時の若い組合員の意を汲んだ組合運営をした。組合の主事業は、まだ順調であった見本市開催であった。

ガス窯の燃料（ブタンガス）を供給するニイミ産業と交渉の上、各組合員のガス仕入れ代金を値引きして、その値引き分を組合収入とした。

そのニイミ産業の協力は、土谷が理事長の間のみという約束であったが、現在もつづけて頂いていることを、新美社長に感謝しなければならぬ。

平成四年から一五年一〇月までの五代理事長は竹内美郎（京都製陶・会長）であった。

竹内は、京都陶磁器協同組合連合会会長も務めた。

平成三年五月から始まった平成不況は、翌四年頃から京都陶磁器業界にも広がった。その初期は、メーカーである窯元、中でも比較的高額品である石もの（磁器）の製陶会社を襲った。

日吉陶業の主産品こそ、その石ものであり、苦しい時代を最初期から経験した。その後、不況の波は高まり、今や京都の

陶磁器業界全体がそれを受けているといっても過言ではないであろう。

平成一一年四月、日吉組合は、高島昭雄、高野史朗らを先頭に全組合員が一致協力して、「日吉窯元まつり」を立ち上げて開催した。

以後毎年開催し、今年四月には第六回日吉窯元まつりを開く予定である。

この企画の実行には、日吉組合の組合員のみならず、今熊野一帯の他業種の方々のお力添えが大きい。

また、製陶業と言う同業の立場から、五条、泉涌寺をはじめ、京都の多くの窯元の方々のご協力があつてこそ成り立っている。

「日吉開窯九〇周年」を記念して、その記念事業をこの一年間、現理事長高島昭雄（洗春陶苑・社長）を中心に、全組合員が協力して実行してきた。

ひとつの区切りの記念すべき年ではあり、先達の苦勞を偲び、物故者への追悼を捧げる。

そして、同時に、どう美辞麗句を考えたとしても、如何ともしがたい現在の私たちの置かれている、あまりにも厳しい時代の転換期の現況に対して、危機感以外の甘い感情は持ち得ない。

毎日の生活のほとんど全てを、陶磁器を作ることに費やしている私たちは、しかしながら、あまりにも多くの皆様のご助力とご支援を受けていることに、心からの感謝をいたします。

そして、真の危機感は、私たち日吉陶業に携わる者たちの真の協力を可能ならしめます。

今から一〇年後の、一〇〇周年への通過点であるこの年に、未来に向けて今を生きる歩みを、日吉陶業は続けているのです。

文責 土谷 誠

日吉のいまむかし

川尻 一寛

日吉に生を享け、今年ではや七三年目を迎えようとしている。物心ついた頃から、ご近所は製陶に何かしら関係ある家々で、そういう人々に常に囲まれて育った。あちこちの登り窯からは黒煙が立ち昇り、行き交う人々も活気に満ちていた。そんな当時がとても懐かしく感じられる。

時代の流れと共に登り窯の煙禁止の条例が施行され、日吉から煙が消えることになった。その後一般住宅が瞬く間に増加していき、まわりの環境も一変した。やがて製陶業に携わる人々も減少して、いつのまにか昔の活気は消失してしまい、誠に淋しい限りである。

しかし今、製陶業に従事する若い人達が、新たな時代をひらきつつある。窯元まつりを催して日吉の製陶業の存在をアピールしたり、食器研究会などをして共に勉強し合う姿勢には拍手を送りたい。

今の時代を生き抜くために、各自の持つ個性を充分に発揮しながら、同時に仲間意識を持って情報を交換し合い、今後とも共存共栄をはかっていって欲しいと期待している。

開窯九〇周年に寄せて

伝統工芸士 武内 敬吉郎

昭和一三年走り梅雨の雲の垂れ込める京都に私は東京より来た。

小学校一年であった。まわりからは、江戸っ子とか、江戸弁などと陰湿な苛めによる登校拒否ぎみながら、今で言うストレスが原因の腹痛などの体調不良もただ養父の叱責を受けて過ごす日々であった。

当時の日吉の町は登り窯や建物を覆うトタン屋根、工場などのトタンの波板も所々コールトールで塗られているものの腐蝕していた状況が多く見られた町の様子であった。

月末に近づくにつれ、登り窯の其処彼処から立ち上る黒煙に、タンスの中のものまで黒ずむ薄墨の町となった時期だったが、行き交う人々の中に桟板(下げ板)を担いだ職人が毎日のように見られ、春は花見に夏の網船、秋は松茸狩りにと酒宴に興じる者などで活気に満ちていた。昭和三〇年初に

低迷期はあったものの、当時川口松太郎著「窯ぐれ女」がヒットし、ちょっとした焼き物ブーム的ムードのある後、田中角栄の所得倍増論を機に日本はバブルへと突入し

ていった。

当京焼・清水焼の産地としてはそれぞれの地域的な特色として、五条地区の芸術性はあるもののやや閉鎖的な面、泉涌寺地区の開放的で互助性が魅力としてある点が色づけ出来るのではないが。

当日吉地区は個々のカラーが強いがための主張の強さはあるものの、他地区に先駆けて「窯元まつり」を実行に移して、今年で第六回目に至るなど新進気鋭の人材を業界に温存しているという事実は誇らしい。

世情の変化に相応して新天地を求めて、他に陶業団地へと移った人、低迷する消費に販売方法を求めて挑戦するもの等々、常に業界のリーダーを日吉地区は多く輩出している。

以後更なる日吉地区の発展を期待して、百周年、百十周年へと日吉地区特有の気概を持った革新的リーダーがこの地より育成していくことを願って止まない。

今 思うこと

市川 正吉

正直、今の自分がこの地で陶業に関わっているとは考えもしなかった。小学校の卒業文集にも違う将来を描いていた。

「陶業が身近過ぎるといふこと。家業を継ぐということへの戸惑いと重さ。」

もちろん、小学生の自分がこんな考えに縛られていたと言うわけではなかった。しかし、祖父が三代目として続けていた窯を、その後継ぐものがないなかったのも確かだった。どこの窯元も抱えている「後を継ぐものがあるのか」と言う問題が我が家にもあった。祖父は窯を閉じることを覚悟していたと思う。叔父も叔母も、そして母も全く陶業とは関わりのない職を選択した。しかし、みな窯を存続するということを考えなかつたわけではなかつたと思う。私も一度もそのような話し（継ぐと言うこと）をたずねられたことはなかつた。

しかし、私が高校の頃、将来の選択で、美術的なことへの興味からデッサンを習い始め、最終的には芸術系大学の陶芸科を受験することを決めた時、家族は非常に力になつてくれた。自分は全くと言って頭に無

いことではあったが、家業である陶業に少し近づいたことは間違いなかった。

それから、大学の陶芸科、陶工訓練校、工業試験場と、陶磁器の知識を学んできたが、それも他人から強制されたわけではなく、自然とこの道を選んできたように思う。

その間に祖父は他界し、この地で制作（作業）するようになった今でも、最初に言つたように、この地で陶業に携わるようになったことは不思議に思う。

だんだんと私のような、昔のもっと活気のあるこの地と陶磁器業界を知らない人間が増えていくのだろうか。そして多くの「後を継ぐものがあるのか」と言う問題がなくならないのも確かだろう。そして伝統的なものに意識の足りない人間も増えていくに違いない。

しかし、日吉の焼きものが、多くの先駆者の残してくれたモノから学び、伝統的な技術力と知識、経験と新しい発想、デザインの探求がうまく混ざり合って、京都の焼きものをリードできるよう、一日一日続けて、もっと先へ進んでいきましょう。

九〇周年への想い

伊藤 紫峰

この度、日吉地区の開窯九十周年を迎えることは、先人の焼き物に対する研究心、志の高さを現代の陶人へと日々受け継がれてきた賜物だと、心より感謝しております。

私も現代の一陶工として、当組合にお世話になり、早六年が経ち、月日の過ぎ行く早さに驚くとともに、反省の日々を送っております。私自身の作陶はもちろんの事、次代の人達に少しでも何かを伝えられえよう努力したいと、今この原稿を認めながら、思いを新たにしています。

また近年、不況の文字が紙面を賑わせている中、組合事業も活発に行われ、組合員同士の目的意識や、意思の疎通も一段と高まっています。それは昨日今日出来るものではなく、組合員にとっては何よりの財産だと思っております。

今後百年、百五十年と日吉地区の更なる発展を願い、微力ながら貢献できることを今後の課題としていきたいと思っております。

二人の友人に

井上 春峰

「アンパン」というあだ名の子供がいた。彼は両親と姉、妹の五人家族。ぼつちやりとした顔は笑うと人なつっこいえくぼができる、色の白い利発な男の子だった。小学校に入学するころになると、よくお父さんの手伝いをしていたという。

中学校では生徒会長に選ばれるほど友人からの信頼が厚かったし、クラスではその中心的な存在だった。高校時代には京都市立美術大学受験に向け、デッサンに励み、その実力は群を抜いていた。

不幸なことに、中学校を卒業と同時に母親が他界し、高校を卒業する年には父親を亡くした。そのため、大学受験に失敗すると進学をあきらめ、家業に就いて、生活を支えねばならなかった。焼き物を業とする家の跡継ぎは府立の訓練校で製陶技術を習得し、市立の工業試験場で釉薬や焼成を学んでから仕事に就くものが多いなか、彼には幼いころから父の手伝いを通じて身につけた技術があった。といつても、すぐに社会に通用する焼き物ができるはずもない。ただ、彼の技術が「打ち込み」と呼ばれ、

輻輳で挽いたものが、乾燥しないうちに型に押し当てる模様と形を作る特殊な技法であったこと、社会が高度成長に入った時代でもあったし、姉がその勤めで得た収入で生活を支え続けたことに加え、持ち前の努力で仕事に軌道に乗るまでにそう時間はかからなかったようだ。

それでも悩みや困難、寂しさがあったろうことは推し量ることができる。そのころ、友人と一緒に騒ぐことを好み、酒や麻雀の卓を囲むことも多かった。ただ、酒を飲むと蕁麻疹ができることが悩みだった。

良き伴侶を得て、彼の生活は一変した。作家活動に精力的に取り組み、自宅、工場にと三階建を新築した。初めての個展はこのころだったが、茶道具を展示するものだったため振るわなかった。以後、美術陶芸に方向を定め、伊東慶氏に師事してその才能を発揮し始めた。磁土の盛り上げに顔料を用いて作り出す彩花の世界、また公募展に出品した艶をおさえた緑釉による大作等々、注目すべき作品を生み出している。日吉地区に青年会を作ろうと、その中心になったひとりが彼である。

その青年会が設立されて、その会長に推された私は一人の大柄な男に出会った。彼は日吉地区でも有数の窯元の長男に生れ、若いうちから工場の一部を任されて、自身の作品に、日本工芸会にと自在に活躍する作家でもあった。恵まれた家庭に育った彼らしく、強烈な個性と、こうと思ったことは頑として曲げない意志があった。普段は強面であったが、笑うとこれが同じ人間かしらと思う程いい表情になった。

五条の陶器祭では青年会のテントに立ち、ちよつとアルコールがはいった名調子でお客をさばいては、「これで物を売ることがわかったぞ」とご機嫌だったことは忘れられない。

彼の名前は古川利夫、幼いころ「アンパン」と呼ばれた男は加藤良孝という。加藤良孝はヨーロッパで開催された公募展で受賞し、美術雑誌に大きな文字で名前が掲載されたころ、古川利夫はその得意とした釉裏銀彩の技法による作品で日本工芸会近畿支部展において総理大臣賞を取った年に、相次いでこの世を去ってしまった。どちらも四十代という若さで、あまりに生き急いだ人生であった。

私はこの早逝した二つの才能を惜しむ。せめてこの記念誌にその名をとどめ、彼らが忘れ去られることがないようにと願いたい。

何故この職に

巖田 亨

電気関係の学校を出ている私が、何故この職についたのか、今も完全に解っていません。就職期にあたって、私の兄が、当時（昭和四十六年）深田水明窯で轆轤をしておられた田中平氏（現和邇にて開窯）と友達であった事と、田中氏の師匠が寺尾陶象氏の父である寺尾仁一氏であった事がこの職につくきっかけとなりました。寺尾氏より吉田瑞泉窯を紹介して頂き、以後十八年間お世話になりました。

平成元年に山科で独立開窯し、平成十四年四月に吉田瑞泉夫人美代子様のご好意により、この日吉に戻ってくる事が出来ました。

京焼・清水焼のメッカ日吉にて仕事ができる喜びを感じて作陶していきたいと思っています。

今まで、そしてこれから

加藤 吉継

私は蛇ヶ谷に生まれ育って五十年経ちました。

この頃、ふと過去を振り顧みて思うことがよくあります。

私の人生は「こんなもんやるか。」陶磁器を作って焼いて、妻も子供もいて、それなりに生活をして楽しく暮らしている。「それでいいのだろうか。」

私が子供の頃は登り窯の大きな煙突からもくもくと黒い煙が上がり、職人さん達が棧板に品物を載せて、土の道を行き来している姿が思い浮かびます。人々が活気に溢れ、地域のコミュニティがあつた。その頃の蛇ヶ谷が懐かしいです。

その活気を取り戻す一環として日吉組合の事業で桜の咲く四月に窯元まつりが毎年開催されています。そのおかげで同業者の一体感が生まれ、蛇ヶ谷に少し明かりが見えてきたように思います。

窯元一軒一軒が技術を磨き、いい京焼・清水焼を作って地域を盛り上げていければ良いと思います。

私は組合の一員として、いろいろな事業

に参加していきたいと思えます。

日吉開窯九〇周年にあたって

川尻 潤

九〇年前、この地に初めて窯が築かれた頃、皆いつたいどんな仕事ぶりだったのだろうかと思いを馳せる。登り窯を使った焼成は今よりうんと重労働であつただろうし、また、窯焚き専門の渡りの職人さんがいたとも聞く。成型は電動ろくろなどまだ無く、蹴ろくろで、伏せ型は石膏ではなくて、まだ素焼きのものを使っていただろう。転写はせいぜい銅版の稚拙なもの？いや、この地では転写など邪道としてもっと品格のある品物ばかり焼かれていたかもしれない。

さて、そんな時代の変化によって魅力が色あせ、風化していく陶磁器がある一方、普遍的に価値をもち続ける陶磁器がある。日吉開窯当時にすでに名品として伝来していた乾山や仁清は今もなおその価値を湛えて多くの写しがつくられている。あるいは、この九〇年間に新たに生み出され、現在、名品といわれるものも数多くある。そ

これらのいくつかは淘汰され、また、いくつかが次の時代へと伝承されてゆくのだらう。

人間の命のはかなさの裏返しなのか、普遍として世に残るものを作ってから死にたいと、実は私はずっと思い続けている。ものづくりなら誰しも思うことかな、と思う反面、作ったものをずっと未来にも人々の記憶に留めたい、と思うなど、なんだか欲しくて恥ずかしいことのようにも思う。

実は、その「普遍」になりうるような、ある先生の仕事ぶりを、学生時代、実際に見たことがある。すでに巨匠といわれているその先生の持った筆の先が、紙に触れて、走った瞬間、そこに命が吹き込まれた、と錯覚するばかりの、それは、まさに神の領域の仕事だった。背中に電気が走った。あこがれた。そしてそれ以来、私は、いつかそんな仕事を自分でもしてみたいと夢見るようになってしまった。

私にとつての日吉

倉元 真佐夫

「おまえは手先が器用や。」と小さい頃父親から言われたことをふと思い出したのは、皮肉にも作品を作っている最中にうまくいかずに「何故みんなと違つて不器用なんだろう?」と考えていた時でした。

お世辞にも器用とは言えない私にとつて家業を継ぐと言つことは重荷でもありません。

それでも何とかやつて来れたのは日吉地区の人たちに助けられ、教えて頂いたおかげと言つても過言ではありません。惜しみなく技術を教え合い、「成功」「失敗」を言い合える環境がこの日吉にはあると思います。九〇年前に開窯されて以来、いくつもの試行錯誤といくつもの苦勞を乗り越え、皆でこの日吉地区を發展させてきたのでしよう。

そして今度は私達が次に繋げていかなければならないと思います。

作り手として

高野 史朗

仁清、乾山、道八と言った達人たちの後に、当時活躍していた、工芸プロデューサーの影が見え隠れする。その作風は京友禅の文様と同様に（唐子文・唐草文・青海波文・宝尽くし文・吉祥文・市松文その他）あまりにも多い。誰かが後ろで糸を引いていたのだ。蒔絵の世界も例外ではない。

その後の時代も琳派と呼ばれる画家達が、五代清水六兵衛やその他の陶芸家にデザインを提供してきた。彼らのデザインをコピーして現在まで京焼、京友禅、京蒔絵は生き残ってきたと言って良い。いま、共に存続に危機にあると言って良い。

弱小企業が何をどうすべきか？おのずから見えて来る事は、新しい作風を生み出す人間を発見する事、またこの時代の流れを見失わない事、もう一度世界に誇れる京都文化を生み出す事。

販売する事に必死になっている陶器屋が増えた昨今、「作る」事に目を向けて、異なった芸術や作家に目を向けてみたいものだ。

窯元の家に生まれたこと

武内 真司

私が生まれた昭和三〇年代初期の頃は、丁度、登り窯から電気炉へと移行する時期に当たり、実際には、子供の頃に登り窯を焚いていたという記憶はありません。

まだ火が入って活躍していた頃の往年の姿を残して存在はしていたものの、使われることはありませんでした。役目を終えた登り窯は、子供たちの良き遊び場なっってしまったように思います。

当時はまだ、国民全体での所得がそれほど多くない時代で、高度成長期に差し掛かる時期でした。国全体で少しでも多くの時間働いて、所得を上げることが誰にとっても暗黙の常識のようなもので、私の両親も夜遅くまで仕事をする、いわゆる、“夜なべ”をしている姿が今でも目に焼き付いています。あの時代はそうやって、働かないと食べていけないという時代だったのかもしれない。両親のあの当時に費やした労力には頭が下がる思いがしますが、反面、夜遅くまで、裸電球一つ灯る中で働くその姿は、少年の私にとって決して明るい光景には映りませんでした。

焼き物の仕事は、暗くてつらい仕事なのだというイメージがその頃の両親の姿を見て染みついたような気がします。

そんなイメージが強かったせいか、窯元の家に生まれたにもかかわらず、家業の焼き物の仕事を継ぐのが嫌で、自分が好きな電気関係の仕事で将来はしようと学校も工業高校から工学部へと進みました。

しかしながら、いざ就職を真剣に考える次期になると、自分の気持ちの奥底にある窯元というものへの誇りを認識するようになり、結局はこの仕事に就くことになったのです。

時代は、高度成長期からバブル時代へと移行し、現在、平成不況と言われる中、決して楽に儲かる仕事ではありません。焼き物を作る仕事の形態やそれを販売するための流通形態も大きく変わっていると思います。

情報化された現在では、もはや三〇年前の流通形態は通用しないようにも思いますが、発達した情報網を利用した販売形態が現在、そして未来には主流になっていくことでしょう。

日吉地区に初めて窯が築かれてから九〇年。この地の歴史に敬意を持って地域を敬

愛し、この地に踏み留まりながらも、日本全国、ましてや全世界にも広く自分の作った焼き物を発信するような、そんな仕事をこれからはしていきたいというのが現在の私の夢です。

私と組合活動

田中 宣夫

現在は伏見区の深草で仕事をしています。が、私は生まれも育ちも日吉地区です。

私が小学校に上がるかあがないかの頃までは、共同窯という登り窯があつて、作品が何かを焼いてもらうために、父に引くりヤカーの後を押してついていったことを覚えていません。

私の父はだいたいは茶わんの上絵を描いていました。父は、私が学校へ行く時も、帰ってきた時も、銭湯へ出かける時も、戻つて来た時も、寝る時も、目を覚ました時も、いつも仕事をしているように見えました。それでいながら家にはあまりお金があつたようには思えません。子供心ながら、この仕事はお金には無縁のように

思つたものです。

大人になつても、この仕事をしようとは思いませんでした。

先日、日吉組合からのご紹介で、同じ組合員の高野さん、加藤さん、倉元さんとの四人で山崎第二小学校へ、主に陶芸のひねりの一日教室のようなものに伺いました。チーフの高野さんの陶器のいろんなお話しの後、小学生からいくつかの質問を受けました。そんな中で「いつも茶わんばかり作っていて飽きませんか？」と言つものがありました。少し考えて答えたのは、「自分で満足できるものがなかなか出来ないの、そう簡単には飽きることはない。」これが建前であることは、皆さんには明白でしょう。小学生たちには、こつ言つしかなかったのです。でも、飽きないと言つのは本当なのです。しかし実は、飽きている余裕がないだけなのです。納期があつたり、窯の段取りがあつたりで、いつも何かに追われているような気分です。それでいてやはり今でもお金にはほとんど無縁です。

「何故この仕事をしているのですか？」と言つ質問もありました。「自分にはこれしか出来ないから。」と四人のうちの誰か

が答えました。正直な答えです。それは私も同じ思いです。しかし少なくとも、私にはそれだけではないのです。だと思いたいのです。いつかは自分も「満足」を求めて仕事をできることがあるような、またとても大きなお金に直結する仕事があるような、そんな希望をいつも持っています。

もしかすると、他にもそう言つた組合員が少しくらいおられたから九〇年もの長い歴史を築く一つの力になつたのかもかもしれません。そしてその思いが、この先更に一〇〇年、二〇〇年の歴史を支えていく、小さな力の一つにもなれるのではないかとも思っています。

歩くと、風を感じる。

土谷 誠

偶々ですが、日吉組合創立の二ヶ月ばかり前に、私は生まれました。今年、四五歳です。若輩ですが、人生の折り返しはもう過ぎました。

私たちの仕事場のある、ここ日吉に初めて窯が出来てから、九〇年になります。「九〇周年」は恰も「苦渋・執念」の感さえある経済環境の中で迎えたと言っても過言ではありません。

この記念誌の編集に携わっています。その発刊は来年（十六年三月）になります。「苦渋・執念」の終わった翌年早春になることは、新しい出発のために喜ばしいと思います。

ともあれ、先人や先輩の努力に敬意をいだき、また現在の困難な状況下で清水焼の陶磁器作りに全力を注いでいる友人たちに共感を持って「日吉開窯九〇周年」を祝います。

最近、健康のために散歩をするようにな

り、ここ日吉界隈を毎日歩きます。歩きながら考えることや、感じること。…。

九〇年という年月は長いと言えば長い年月ですが、陶磁器の歴史ですとか、人間の歴史ですとか、地球の歴史とかから見れば、まさに瞬きの一瞬ほどの時間です。

京焼だ、清水焼だと言っても、それらから見れば、その歴史は、欠伸を一回するほどの時間しか経っていないのです。

瞬きの一瞬や、一回の欠伸に真剣になつてあくせく働いています。それを、しかし私は無意味なことだとも思わないし、馬鹿げた悪あがきだとも考えません。

ましてや、陶器を作ることしか生きる術を持たない自分を卑下もしないし、下司だとも思いません。

真面目にあくせくあくせく、陶器を作る、買ってもらう。こんな時代にこんなことをできることは、贅沢な幸せです。

歩くと、風を感じる。

その風は、そんなちっぽけな時空を遙かに超えた、永遠の彼方からさやさやと吹いてきて、元氣や勇氣を毎日、私にもたらしてくれる気がします。

私の仕事観と組合活動

寺尾 智文

今、仕事で考えている事は、作品作りと、個展をすることと、いかに使い手に喜んでもらって皆で協力して利益をあげていく事です。需要が低迷する中、使い手の事を考えたデザインを、そして土、釉薬を工夫して技術を高めて、売れる、個性豊かな商品を作りたいです。そのための方法を考え、実際に行動に移し、成果が出るまで粘り強くやり続けるのが、すぐに結果が出ない地味な作業のために、大変難しいです。今まで何回か成果が出るまで続けられなかった事を反省して、強い思いでやり続けたいです。

そして作品作りは、茶道具、食器の枠の中で、またそう言う枠から少しはずれた所で自分の思いで物作りをして、使い手に提案する。商品的な規則がないので、自分が納得する。そして個性豊かな楽しさを原点とした物作りをしたい。

個展などでお客様の話を聞いて感じる事は、作品を使う事によって、どれだけ楽しい豊かな生活が送れるかと言う視点で作品

を見られていると言う事です。作品は自分の思いで物作りをするのだが、こう言った事がイメージできる焼き物を作りたいと思います。我が組合に入って十年余りですが、その間色々な人との出会いがあり、技術面や仕事観など、話し合いができ、刺激を受け、プラスになりました。

京都日吉製陶協同組合は各組合員が各自を尊重しつつ、窯元まつりなどの行事には力を合わせて動ける組合であります。これからも、より各組合員並びに日吉の窯元の商売や技術、創作活動にプラスになるような活動をしていきたいと思えます。

仕事の手を止めて、ふと思う事

深田 英一

我が家業である清水焼の製造に従事してからも二〇年以上の歳月が流れました。当時は当然の事ながら、この仕事の難しさを考える事もなく、ただ手に職をつけるという事と家が窯元であると言う事だけではつきりとした目的もなくこの世界に入りました。

しかし昨今つくづく思う事は、この仕事ほど難しいものはないと言う事です。

現在の他産地の京都に追いつけ、追い越せのパワーは凄まじく、高度の窯業機器の開発、改良で成形された素地に、研究、改良を重ねた転写等により装飾を施された製品がデパートなどの売場面積を一段と広げ、これからも続くであろう低成長時代に、価格破壊競争の勝者たらんとしています。

そして現在まで私達が目指してきた手作り、手描き、少量多品種、高品質を誇る京焼・清水焼の牙城に迫る勢いを強く感じます。

私のような若輩が申すのもおこがましいのですが、陶磁器業界、特に京都にあって

は製造に従事する者全てが、俗に言うサラリーマン的就職、歯車の一員として工程に携わるだけでは許されないものがあります。

製造に携わる者全てが各自の責任を持って、「自分の作る焼き物は最高の物である」と言うプライドを持ち、新しい技術と伝統の技法に磨きをかけ、二十一世紀の京焼・清水焼の不動の座を揺るぎ無いものにして行きたいと切望する次第です。

日吉開窯九〇周年によせて

藤田 義孝

日吉開窯九〇周年、おめでとございませぬ。

私がこの仕事をして四一年が過ぎようとしておりますが、今振り返ってみると、修行時代から独立と、色々な業界の皆様のご助言などで仕事をしている現在です。

先日、日吉組合四十周年の記念誌を拝読致しました。その時先人達の文に、不景気の事がありました。今も不景気が吹く最近ですが不景風に負けずに先人達の伝統の良い作品などを手本に、現在の京焼・清水焼を思考しながら作品を製作していこ

うと思っております。

歴史が教えてくれること

安田 一平

陶磁器は本来生活に欠かせないものとして過去から現在へと作り続けられてきました。日本では縄文、弥生の土器或いは六古窯の製品と言えば甕や壺などの保存土器がほとんどです。つまり陶磁器は日常の必需品として存在していたわけです。

ところが他産地とは遅れて江戸初期にやっと確立された我が京焼は別の一面を持っていました。戦国の乱世が終わり平和な時代となり、茶道や香道などが大宮人、大名、武士などのいわゆる特権階級の間で「たしなみ」としてもはやされるようになりしました。

その道具の中心を支えたのが清水焼で、特に茶入れなどは我が城にも匹敵するほどの価値が見出されたほどです。そこには生活の中での必需品ではなく、「ハレの日の贅沢品」としての京焼が幅を利かせて存在していました。こんな京焼の歴史の側面を踏まえ、今、モノが売れないのは決して

時代のせいだけではないと思います。我々の「新しい」伝統品を「誰のために」作り、「誰と」組み、「どこで」売るのかと言うストーリーを明確にして商品開発をしなければならぬと思う昨今です。四百年前の陶工の素晴らしいDNAを途絶えさせないためにも。

「往く川の流れば絶えずしてしかも元の水にはあらず…」

日吉開窯九〇周年記念「陶芸の巨匠と子供たち」展 の記録

会場…京都市立今熊野小学校作法室

会期…平成一五年四月五日(土)・六(日)

平成一五年四月四日、今熊野小学校作法室に、続々と陶芸作品が運び込まれた。その数、約五〇点。人間国宝の作品もあれば、オブジェとして現代陶芸の最高峰に位置する作家の作品もある。また、日展、伝統工芸会の巨匠の作品もある。作法室はその日の午後、美術館になった。

隣の部屋ですでに子供たちの作品が並んでいる。

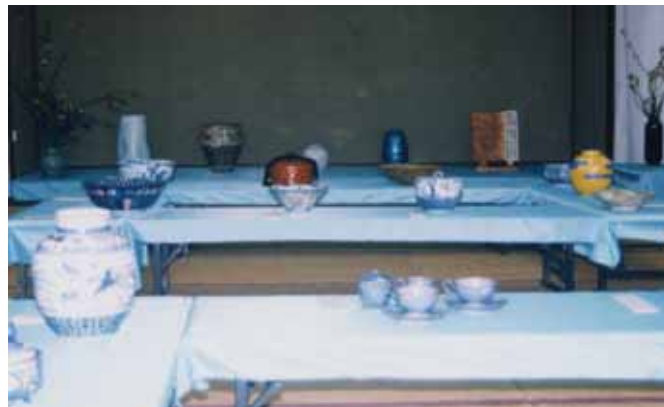
こんな光景、今まであっただろうか？今、むかし、同じ「今熊野日吉町」の地で、粘土に息吹を与え、作品として生まれ変わった数々が、時を越え、一堂に会したのだ。すでに完成している出品目録には、巨匠の名前と子供たちの名前が併記されている。大胆な目録だ。

その日「陶芸の巨匠と子供たち」の作品は同じ作法室で眠りについた。

明けて四月五日午前九時。ガードマンも配置についていよいよ開場。翌六日と合わせて二日間限りの夢の「特別展覧会」は初日の雨にもかかわらず約四〇〇名の観客を集め、大盛況のうちに終えた事を報告しペンを置く。

開場をさせていただいた今熊野小学校、快く作品をお貸し頂いた作家並びにご家族の皆様、そして未来の日吉地区を支えるやも知れない子供たちに深謝して…。

(安田 一平)



日吉開窯九〇周年記念「お膳の中の京都」展 を開催して

会場：南禅寺境内 南陽院

会期：平成一五年一月一六日（日）・一七日（月）

平成一五年一月一六日（日）から一七日（月）の二日間にわたり、初めての試みとして、各組合員がこのために新たに作った豆皿、五寸皿、湯呑、箸置きに京漬物、京の新米のおにぎりを乗せ、京都の宇治茶を入れて食する会を南禅寺境内「南陽院」にて開催した。古きよりの名刹南禅寺で、京都を目で、舌で、心で味わって頂く会と同時に私達の作品を逸品展として展示した。出品作品も個性豊かに多種多様にわたり、また秋の紅葉の観光シーズンともあいまって、盛況のうちに終えた。

今回、二日間でのお膳の販売は五〇〇食分を越える事となった。

しかしながらコンセプトはあくまでも陶器を見てもらうこと、その製品を買って頂くことであつた。どれだけのユーザーに見てもらえるか？いかに作品に目を留めてもらえるか？二日間の開催でその問の結論を求めるのは早過ぎる。

ただ、一〇〇〇人のユーザーや、京料理店にも案内状を出したことも、この結果に繋がっているであろう。これからもこのような行事を開催し、恒例化していくにしても、今後いかに私達作り手が、使い手と繋がり、リピーターとして継続していけるかは、各組合員の努力にかかっている。

（高野 史朗）



日吉開窯九〇周年に寄せて

京都日吉製陶協同組合青年会

会長 土谷 徹

京都日吉製陶協同組合の皆様、開窯九〇周年おめでとうございます。日頃お世話になっております青年会を代表してお祝い申し上げます。

子供の頃、先人や先輩方から戦前や戦中の話し、好景気に湧いた話しなど、昔話を聞かせて頂いた事を思い出します。登り窯の日など、鼻の穴が煤で黒くなった懐かしい思い出もあります。焼き屋の大将やそこに働く職人さんたち、そしてまた問屋さんたちなど、多くの人の努力と生活があったから今の私達の仕事があるのだと九〇周年のこの時、改めて感謝しております。

これから先、私達の世代が一〇〇周年はおるか一二〇周年一五〇周年と続けて行かねばならないのですが、今の時代、先行き不透明な部分もあります。このままで良いのかどうか自問自答することがあります。清水焼つまり京都と言う枠が本当に必要

か？
伝統産業と人々の生活とが離れすぎていないか？本当に手作り、手描きが良いことか？

九〇年の間にいろいろ背負わされて、守らねばならないことが多くなったのではないのでしょうか。もちろん私自身、京都、伝統工芸、手作りなどの縛りはずす気はありませんが、我々若者ぐらいは、もともと身軽に、元気に、貪欲に、野心に燃えて突き進んでみたいものです。一〇〇周年、一二〇周年と若返っていくくらいに！

いろんな考え方がありますが、日々反省しつつ出した私なりの結論がひとつあります。それは、ふつうのひとたちと感性を共にできる陶器を目指すことです。ふつうのひとたちが少しだけアコガレルデザイン、使い方、価格などに明るい将来があるように思えてなりません。

日吉地区で仕事をさせて頂いて恵まれていることがたくさんあります。失敗したことを話せばアドバイスをしてもらえる先輩方がおられます。わからないことを聞け

ば、ライバルであるにもかかわらず気前良く教えてくれる同輩たちがいます。展示会や組合事業が滞りなく進んでいくのはそこに集うひとたちの協力的な作業があるからです。どれをとってもこの地区のひとたちの人柄が出ていると思います。もし、この地でないとここで仕事をしていかなら、ここまでやってこれなかっただろうと思います。

それだからこそ、これからも日吉地区の陶業者の共存共栄を切に願います。そして、私もこの地で仕事をしていければ幸せです。

日吉開窯九〇周年記念座談会

「日吉陶業の今とこれから」

平成一六年二月
於 五条坂「きよみず」



川尻 最近、デパートの画廊で初めて個展をしたばかりなんです。それで考えさせられるのは、マーケティングとエンドユーザーへのアフターケアが必要だということです。ユーザーの人達が、どうやって物を買うのかの研究が必要だと思います。

倉元 そうですね。でもその部分は、僕たち作り手が今まで以上に組みまないといけないですよ。

司会 今のお話は大切な問題だと思えます。後でまた皆さんに対談頂くとしまして、日吉開窯九〇年、日吉組合創立四五五年と言つことでお話を願います。

安田さん、松齋さんの初代は一番早く日吉で来られた一人ですけれど…。

安田 何で、初代松齋がこの日吉の地を選んだんか？僕自信はここで育ってないし、実際に登り窯の焰とか、昔の



司会 本日はお忙しい中、日吉開窯九〇周年記念の座談会にお集まり頂き、有難うございます。まず、皆様のご紹介をします。日吉組合副理事長の高野史朗さん、同じく安田一平さん。そして井上幸次さん、青年会会長の土谷徹さん。陶芸作家としてもご活躍で、ユニークな発想をされる川尻潤さん。それから日吉組合と青年会の両方で多くの仕事をされている、伊藤一夫さん、

倉元真佐夫さん、寺尾智文さん。以上の方々です。録音、写真撮影などの作業をするのは、記念誌編集委員の高島慎一、武内真司、馬場啓郎です。司会は私、土谷誠が致しますので、どうぞ宜しくお願いします。座談会のテーマですが、「日吉陶業の今とこれから」ということです。日吉で陶器を作っている人ばかりです。テーマにこだわらず、お話し下さい。

厳しい作業条件は見えてないし…。



井上 私のおじいさんの話
しによると、昔は、日吉と
いうのは竹藪が多かったら
しいですね。

安田

その竹藪を切り拓くところから始まっ
て、今まで陶器屋として続いてきた
んやね。

高野

ちよつと話題が変わるけど、今は陶
器の販売形態というものの過渡期に
あるように思います。

寺尾

そうですね。でもそれと同時に、
よく言われるのは、京都の陶器は、
技術はすばらしいということ。す。
それは良いことですけど、京都は、
技術面以外の、材料の研究が不足し
ているのではないのでしょうか？

井上

それは、京都は土が出なかつたら、
原料の勉強がお留守になつてきたん
でしょうね。その分、形とか絵の向
上はあつたかもしれませんね。

安田

京都（の陶器）は何でもありのとい
ろがあるからねえ（笑）。

司会

今、寺尾さんの言われた、京都の技
術ということですが、「技術」に関
して、お話を聞かせて欲しいので
すが…。



高野 私は、今の京都の陶器
の「技術」のレベルはかなり
低いのではないかと思つてま
す。

例えば、染織の人たちを例に
挙げると、その技術の下敷きつまり
基礎になるデザインの引き出しをも
のすごく多く持ってます。訪問着ひ
とつ作るにしても、何百と言つ色と
柄の引き出しがあるとします。

技術があるのかないのかの前に、そ
の引き出しがいっぱいあるかないか
の問題があるんじゃないかなあ。

陶器は、吉祥文様描くにしろ祥瑞描
くにしろ、染織から転用してるとこ
ろが多いよね。一概に比較は出来な
いと思うけれど、技術としては、陶

井上

染織という二次元の表現と比べて、
陶器の立体の表現、炎の制約とい
うのはあると思います。我々は、「土
と炎と絵の具」を原料にしてるし。

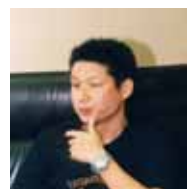
司会

技術の話して話題が進んでしまし
た。確かに、高野さんのおっしゃる
ように、技術以前のデザインのデー
タベースというのか、引き出しの数
の違いは大きいのかも知れません。
ところで、私たちはみんな職人でも
あるわけですけど、職人としての技
術、ロクロとか絵付けの技術そのも
のについてお聞きしたいです。
伊藤さんはロクロが上手ですが、そ
れについてはどう思われますか？



伊藤 ロクロの技術というの
が、絵付けの技術もそうだと
思ってますが、その技術を
持つていても、今、売るため
に作っている日常使いの陶器
に、その技術が本当に必要かどうか
というのがわかりません。

手間ばかり加えたら、とても日常使いの値段じゃなくなるしね。



倉元 そうですね。売れるものと作りたいものという、二つの道があるように思いますね。

伊藤 そう、その両方を出来ると良いんですけど。やっぱりいいものを作っていきたいですね。

川尻 そのためにも、市場を育てるということも大事です。作品そのものの良さをわかってもらえる市場を。技術の良さをアピールしたいものねえ。

井上 それと今は、昔に比べて染付の評価が低くなってきてるよね。

土谷 今は、売り手市場ではなくて、買い手市場だということがあると思います。大人の市場がどんどん細くなって、子供のための市場になっています。昔なら、おじいさんがとても良い時

計とかを持ってたりして、それに憧れるというようなことがあったけれど、今はそういうことが少ない。生活が子供にあわせたもの、子供のためのものというようになってきていることが大きいと思います。

司会

今、子供のために、と言う話が出ましたけれど、我々全

員が、毎日陶器を作っているわけですが、子供の世代、次の世代へ、ということに関して、如何でしょうか？
もちろん今が精一杯、ということもあるんですけど、
我々の子供



へと伝えていくということとは？

高野

私は、技術を伝える必要はないのではないかと、思っているんです。それより私が思うことは、「売る」ということばかりを考える陶器屋が多すぎるということ。「作る」ことを考えてるのが少なすぎる、ということなんです。

「技術」ということですが、こういう技術があることをどこかで見せることは必要だと思えます。それに食いついてくるというかどうかということとです。若者がそれを求めてこないというのを感じます。

それに、「伝統産業」と言う言葉自体が良くないと思っています。技術の継承ばかりしていると、新しいものが生まれません。逆に衰退していくこともあるのではないかと。もちろん、技術が継続していくことを望んで言っているんですよ。

井上

それとは別の話ですが、京都の焼き物は「高い」といわれますよね。私は「高い」と言わないで「値が張

る」と言うんですが。それと、今後は「京都ブランド」というものも必要になってくると思っています。

川尻 思うんですが、以前に、清水焼が見た目の金キラ金のもので売り売れたというのは正常なことではないでしょ。もつと静かな、技術の裏付けで清水焼が売れるのが正常なんやと思います。



安田 それと、これからは作り手の顔が見えるということが大切なことだと思う。

土谷 話を聞いていて、いいものを作るということが大事なのも、いいものをわかってもらえないということが問題なのもわかるんですが、私はいつも五年後、一〇年後の自分というものを考えるんです。その時、普通の生活というのが、大切だと思います。

「普通」とは何か、ということなん



ですが、普通の生活をするための社会ニーズが変わってきていて、今はフリーカップ、フリーポウル、プレートなどが売

ていますよね。そういう新しいアイテムも増えています。世間で売れているもの、使われているもの、つまり、「普通」のものを作れば、可能性はあると思うんです。

そしたら技術はどうするんや、と言われそうですけど、それは趣味でやればいいのかなあ（笑）。

高野

自分は「遊び」で陶器を作ってきたという感覚があるんです。陶器を作る、というよりも、いいもの、いい美術工芸品を作るという意識でしか作ってこなかったと思います。あんまりロマンを感じすぎるといかなね（笑）。

伊藤 でも、その遊び心の部分はほんとに大事にしていきたいところですよ。

司会 私も遊び心ということとは、大切なこ

とだと思えます。でも私は、個人的には遊び心より、真剣さが強すぎていけませんか…。

高野

私は、遊び心も持つてるけれど、今の状況に対する強い危機意識もあるんです。

日吉組合が存続するべきかどうかとも思うし、存続する必要もないんかな、とも思います。

土谷

でもね、僕は、もし全く知らない土地に、陶器を作る設備も道具も準備したからそこで陶器屋をやれ、と言われたらできるかなあ、と思うんです。

ここでやってきたからこそ、陶器屋としてやっていけたんだと思うんです。日吉組合がなくなってしまうのはどうかなあ？

倉元

僕も土谷さんと同じ意見です。やっぱり日吉の陶器屋同士の横の繋がりは大事にしたいし、お互い支え合っている部分も大きいと思います。

高野

語弊があつた
かもしれない
けど、私が思
うのは、環境
としての日吉
組合が必要か
どうか、とは
考えます。

京都の陶磁器
業界を一つに

まとめたらいんじゃないかと思
うんです。それと、組合に入つてい
るメリットが今少ないし、それはな
いといかんでしょう。



川尻

組合は仲良しコミュニティーでい
んかもしれないね。それに、これだけ
個性的な濃い人たちが集まってる
組合も少ないんと違いませんか？

(笑)

安田

新しいアクションを起こす時には、
これくらいの人数が一番いいんかも
しれんね。

伊藤

そうですね。組合でいろいろ事業を



い生活を送ってもらえるの
か、ということなんです。生
活が楽しくなるようなものを
作っていききたいと考えていま

土谷

する時でも、みんなのコミュニケー
ションもとりにやすいし。

我々は日吉窯元まつりをしていま
すけど、陶器祭りがいくつもあつて、
一つにまとまつてしていかないのは、
京都だけでしょう。有田にしてもど
こでも、全体で一つの陶器祭りを必
ずやっていますよね。

司会

いろいろ面白い話しになりました。
そろそろ時間も参りましたので、最
後にどなたかお話し下さい。

司会

作者の想いをお客さんに伝えないと
いけないですし、メッセージとして
伝え続けていきたいです。
す。
本日は、長時間に渡ってお話し頂
き、有意義な座談会になったと思
います。
ありがとうございます。

編集後記

「日吉開窯九〇周年」に記念事業をしようという声が上がったのは、昨年の年初のことでした。

賛同する組合員が多く、昨年初頭の理事会で、九〇周年事業として、春に記念展示会を「日吉窯元まつり」と併催すること、秋には更に大きな記念展示会を開くこと、年が明けて三月に「九〇周年記念式展」を開催すること、その日に発行することを旨として「九〇周年記念誌」を編集・発行すること、が決定しました。

一年間に四つの記念事業をするというのは、それぞれの組合員が自分の窯で作陶し、経営する仕事の合間では、簡単なことではありません。

しかし、総会の場でも全員が賛成し、躊躇なく四つの記念事業を進められたのは、今の日吉組合の姿勢を如実に現しているように思えてなりません。組合員が相互に協力して、現状に風穴を開けたいと私たちの多くが考えていることは確かです。

この記念誌を編集するにあたって、歴史を振り返れば、四〇年前の日吉地区には六

〇ほどの窯元がありました。それが現在は二二名の組合員です。

歴史は移ろいます。

そして、我々二人が二人とも、同じ陶器も作っていませんし、同じ考えも持っていないません。

ただ、私たちに共通するのは、「陶器が好き」であるという一点だと、この小冊子を作りながら実感致します。

最後に、寄稿文を快く書いて下さった組合員各位、お忙しい中、座談会に集まっていたいただいた組合員及び青年会会員各位、そして、ご祝辞を賜った京都府知事、京都市長をはじめとするご来賓各位に、心から厚く御礼申し上げます。

この記念誌を、日吉陶業九〇年に関わってこられた全ての人々に、そして我々と同じく「陶器が好き」なすべての人々に捧げます。

平成一六年三月吉日

編集責任者 土谷 誠

編集委員 高島 慎一

同 高野 洋臣

同 武内 真司

同 馬場 啓郎

同 藤田 和久

